

十  
不  
為  
有

あ

827-2 (澤)

俳諧資料カード	
年代	1825年
編者 (筆者)	松岡
書名	十不為有
備考	

(下垣内蔵)



一 梅を園に植ふ  
 園のまはりに梅の樹を  
 植ふは昔の徳川幕府の  
 文章山王の御代に  
 中へ入るるに梅の  
 植ふは昔の徳川幕府の  
 文章山王の御代に



自序

むすしにあらはししをさるる勢  
人あられと俳諧みづし一六はは  
りあしひまき時の雲はよるま  
あはれぬあはるる句も同て  
まきし風流を生かすはるる  
惜いふさいういもいもの  
一解るる余書ふ下るる題は

良守らまは宗周嗣は五人  
よみ出せふ疑あはしし俳諧は  
さむしきの書は探者まあれは  
けまらふ疑はよるまもみやひふ  
あはれぬこの題よをころの俳仙の  
句しそりりまをたふあはしよま  
すしし興ありそむしし余  
風流をさるる心もあはるる  
閑室の清きししあはるるを

人々待まよとそこのるハその  
 百その半を四時迄あり敷と  
 まるく津しとを九しとくせのと  
 あせくのみ

梅間

遥峯帯晚霞

ハ重霧の夜々いまに夜初次  
 湖喜しひとみ山に二度霧む  
 夕つれまもわらわうすみう南  
 野の末子水見くくく山霞む  
 何一人霧よ清く志まひりり  
 任所もこまこれ山よ夕る  
 霞言く植木引こま御門  
 足袋持て花行りるや夕霧

トホツウニ  
 桃六  
 鳳臺  
 李峰  
 南曉  
 圃竹  
 茶堂

下フサ  
 三

曉臺  
 梅葉

霞より我夕あゝ朝を詠  
 烟塔鳥も紀事かきしり  
 吟詠乃舟にあり海の中  
 袂に露やこゝろまゝ人  
 竹立く遊ふも子孫小  
 加へて木とりては朝に  
 鳥も多し心あり八重  
 春山也露踏こむゆゑ  
 紙書くも是れも云々  
 長束のあやむ日ふる

ハ 鳥よ  
ニチ 世竹  
ニチ 羽休  
ニチ 芳汀  
ニチ 珉屋  
ニチ 拙稿  
ニチ 相屏  
ニチ 相立  
ニチ 鳥水  
ニチ 誓山

春能山巖城道のあゝ  
 市ひびく海やふる  
 霞岫

巴涼  
 霞岫

残雪更粘枝  
 松よりや清き雪より  
 きささきの雪や多し  
 春淺霜連夜

未紀  
 虚白

逢坂と朝露解やも  
 岩崎に松風もゆる  
 鳥頂  
 如水



物<sup>山</sup>も<sup>三</sup>も<sup>口</sup>色<sup>日</sup>す<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup> 程<sup>ハ</sup>丸<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup> 梅<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>  
 ね<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>入<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup> 第<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup> 春<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>  
 園<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>木<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 雲<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 失<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup> 蒼<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup> 梅<sup>ハ</sup>  
 々<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 世<sup>ハ</sup>話<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup> 偏<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup> 標<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup> 月<sup>ハ</sup>  
 梅<sup>ハ</sup>々<sup>ハ</sup>々<sup>ハ</sup> 花<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 上<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup> 月<sup>ハ</sup>ね<sup>ハ</sup>が<sup>ハ</sup>  
 風<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>音<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup> 毎<sup>ハ</sup>日<sup>ハ</sup> 西<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup> 鏡<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup> 花<sup>ハ</sup>  
 梅<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup> 傍<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup> 花<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup> 中<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup> 一<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>  
 字<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup> 風<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 風<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup> 吹<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup> 吹<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>  
 梅<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 春<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup> 春<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup> 々<sup>ハ</sup>々<sup>ハ</sup> 々<sup>ハ</sup>々<sup>ハ</sup> 々<sup>ハ</sup>々<sup>ハ</sup>  
 奈<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup> 梅<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 也<sup>ハ</sup> 哉<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup> 乃<sup>ハ</sup> 及<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup> 哉<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>

山三

空阿

風也

一桂

五明

筆丸

甫岳

其暎

石羊

左橋

知十

ワカサ

ヒモ

ニナ

テハ

取<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup> 梅<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 阿<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 伏<sup>ハ</sup>屋<sup>ハ</sup>  
 春<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup> 夜<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup> 月<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 枯<sup>ハ</sup>木<sup>ハ</sup> 鎌<sup>ハ</sup>  
 辛<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup> して<sup>ハ</sup> 月<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 出<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup> 梅<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 花<sup>ハ</sup>  
 白<sup>ハ</sup>梅<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup> 氣<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 吹<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup> 梅<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 花<sup>ハ</sup>  
 華<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 吹<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup> 梅<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 花<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 花<sup>ハ</sup>  
 飽<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 子<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 梅<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 花<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>

ミカ

佳確

赤守

可都里

千隙

一礎

團款

イセ

柳間黄鳥路

驚<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 木<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 振<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 柳<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>  
 照<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup> 並<sup>ハ</sup>柳<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> 柳<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>

アキ

阿蘇 夏雲



鶯の事道しつゝや池の泡 ムサシ  
 うぐいすの尋あるくも鳴とら サト  
 うら向いて見ゆも眠さき柳うら イセ  
 折てし下はぢりもぬるあき イセ  
 鶯も並ふ木よりきし梅もさ イセ  
 うら心をけしうら汁閑はな イセ  
 鶯もや菜舟流しゆく イセ  
 青柳やさ水をしゆく野下庭 イセ  
 ひとし来し鶯見しを干菜寺 ヒセニ  
 さふくと柳流流しゆく カヒ  
 史千 柴美 一静 龍齋 四澤 虚舟 野渡 菊舟 吾有 帰嬰

鶯の事見しつゝと アヒニ  
 帝徳の家ときれの屋なき アヒニ  
 うら心をけし鶯も鳴とら アヒニ  
 のとけし空見しは柳のうら アヒニ  
 最一なるあし地を摺柳う アヒニ  
 川流し柳もさしり乃傾き アヒニ  
 うら心をけし鶯も鳴とら アヒニ  
 東蒼 朱友 菊川 里院 至為 梅山 晚籟

春江浪拍空

立波千ひうもく アヒニ  
 梅関

登り戸也竹を切けし極の事

紫黒

# 普深花始開

夜の宵半山は口とくさるる

イセ

松園

曙は鳥乃多うるまの柳

鹿野

あけられと暮も疾くまの橋

芝河

明きく玉衣を初花のそそるる

天老

初也也殊きく月半さか

鸞屋

喚勢木も大勢之くゆさる

ミカハ

牟池

依保婚也まも花咲名所さく

保舟

初花也生まはれおいては道

イセ

志節

# 花開紅樹記

露をくの花ものこさぬさる哉

イセ

鶯堂

花咲て是所さるるは菜

大蘇

生死も余所之事也花さるる

ヒセ

菜也

宵寐も糸子と寐ては名は橋

鴉園

つまつくもあはれさるる木は櫻

曾谷

おしきけくきも也玉子松一本

イセ

南井

春あはれ我衣也衣乃ちな

茶静

長うきと香もあつまるや花みせ  
 老りな花見のまを人まは  
 山深く来ても侍を脱り山物  
 中よいるや系糸花はけ  
 花筆皆なく玉く京乃山  
 花子風心のと命家木末が  
 けし事もうハのそちるは様哉  
 花を念寢さりけり山家  
 世いらつもうくあも花の巻きま  
 明可んとししハ花のりみ

ウ 宇橋  
ウ 雨考  
ウ 秋良  
エチニ 秋等  
ニ 北洋  
ニ 相堂  
イセ 杜牧  
イセ 蚕山  
ミカハ 下睦  
 曳尾

里見ゆふもて潜りけり  
 足取人の心あつめそり花みせ  
 るのほちりきこり花の老木  
 花の中り人自鼻やせも

トホウウミ 二九  
トホウウミ 蘭英  
アウミ 黄山  
 宇洋

花閨風雨多

値し起はは皆知家さくうか  
 花を思ふははあつめそり花みせ  
 花分のさうらも花みせ一りうか  
 花のしらぬの影はあつめそり

ムツ 沙路  
ムツ 典人  
イセ 梅雪  
イセ 菊所

世話——けお花のかり月ら

篤老

# 坐久落卷多

はくくくと見て居きはち象櫻が

士朗

菖を也目のさめくぬ人の家

サマキ

茂推

夕々きや冷定まのちちさく

駕風

花ちちやちやけかる蜘蛛の糸

ノト

露穂

ち海花も漏きく——菖乃板庇

洲路

花ふ来くくをのあくくを袖の下

學圃

ち象くくをを也もな花ち指子つ

道彦

散その象を小うつぬくひも里が

ミチノ

介亭

ち象さくくをくくを見う上

左琴

雨ふくくはをくくを花よあまも

イセ

省吾

# 花善封猎香

散花は情平あくく山崎が

アウミ

于當

ちちさくくを象々而見る梅が

エチ

石海

# 頽檐掛古藤

萱熱々煙乃りくく象藤花

梅系

春のや水をやしるる響くは鳥

アキ

宇柏

# 歳昔春由少

花見の日幾日もあつて春言ぬ

桂五

も海もたや空も来はそ袖の塵

セツ、

卧鵬

行はまはこまていしや水の水の音

花山女

留りの戸も阿くくく春の情

且齋

切はを移りも春を惜あり

得芝

# 春盡鳥聲中

山の青や春も老り鳥乃聲  
春深し 柳の枝も鳴河原弱

梅関

牧子

# 深谷夏間鶯

鶯のりりてあるくや昔は花  
老を鳴る言さきり通し  
深谷も入つて鶯老なりり  
うらみの顔く見ると四月が

ま、

武陵

宇仙

雪雄

雪雄

# 緑樹連邨暗

朝虹や美毛ふのよハ雨り降  
 曇れ今の色は光るわくをふりか  
 川越すや口の香ふの中れ一ツ家  
 傘のちのこくえゆふ美毛ふが  
 控授の初遊中くしてや美衣  
 朝心よくおき海りし美衣  
 この毛くし記居より香の下あり  
 見えく魚も木のなく半若葉哉

山雲夏忽繁

棠棟  
 砥石  
 其松  
 巢北  
 蘭前  
 霞外  
 涼濤  
 杉長

毎々や枕の上おふもの峯  
 都ちりしとも見てり夏の山  
 村雲のうけむくきて花いたる  
 目よ暑き山や楮のくわたぬを  
 暑白れ牛追牛半 赤きりり  
 湖や桶ももくくふを云の岩  
 膝たぐ園扇も寄れ今りの  
 魚の揚控も出さくは雲れ峰  
 公海のくもまきくをくや之のみね  
 夕立も来ぬや一は権り本

湯々  
 百蒸  
 篠英  
 布席  
 霞音  
 子温  
 月倉  
 屋烏  
 市雀  
 文常

采風五月寒

暮きるぬ 松風吹て 都くき 壺伯  
 夕ふきの 雨り寒い 閑古鳥 松甫  
 湖を山に 中なり 苔乃花 翠川  
 一人こゝろ 是く定ぬ 道なり 巴由  
 ひとり 是ふのうけ 旦也 蛸牛  
 月ハ松く のあつよ 水雞鳴 龜汀

風對咽鳴蟬

蟬の多おし けりて 鐘のひびき 民情  
 木深し こと 鳴や 蟬の多 一甫  
 夕蟬や 宿を定く 枝うつり 紫名  
 夕蟬や 宿を定く 枝うつり 紫名  
 鳴せし けり 我を 思ふ 桂丸  
 寐所 けり 憂 けり 出 暑 國水

採叢帶雨荷

降ると 奇 露 下 梅 園  
 雨塘

のそくやうに雲もさしとさの雨  
 斗入  
 あしむら月の上から蓮の花  
 茶考  
 夕しげや浮きと見えは蓮よるふ  
 窓巴  
 涼しきよ出さハ志海玉蓮うれ  
 桐柄  
 物鏡平 老の字さるや蓮の花

扇罷風生竹

夜の扇客所くくも来みり  
 漱石  
 けあそめるくもさし竹の中  
 庭雅  
 夜ら友のくよらあも筆  
 路周

藤て見てもあの一衣を水の上  
 箕張  
 さくしはも寝るハ向く早たり  
 路志  
 扇く顔く扇のくく新ハ  
 流芝  
 竹の子や耳くあのみさく船中  
 番中

泉叡到池盡

来あもハ水と汚せも草のちこ  
 而后  
 水そくあハつめし芥子の花  
 淇石

雨餘生晚涼



石山や衣も庭掃五の月  
 雨掃と蝶の羽塵も四月の  
 月あまハ一日の事皆涼し  
 夏は月あけけ風も抜ハ  
 夕立の輝しと望もや其西日か  
 涼しきやる能流り人通里  
 きししけ子撫て通るや松程  
 顔よ降し雨もさくあり夕涼  
 洗ひあけけ馬返り集の月  
 道端く馬あくとを交能月

シナ  
 五キ  
 アキ  
 ミカ

杜農  
 禾木  
 駘六  
 晩翠  
 子山  
 椋鳥  
 甘古  
 尖峰  
 霞石  
 騏上

# 螢入定僧衣

螢ふと来く螢と来く、膝の上  
 ぬすのころと宵もよのふも  
 花も螢洗し牛よついで来ふ  
 而く色の水もさち出ふ螢か

茂桑  
 湖丸  
 望年  
 菊人

# 露氣早知秋

初秋のゆく高けき葎か  
 秋の色けきハ物も帰る

桂園  
 呂石





蒼よりも寒けし〜の多  
鳴るもハハ〜の多  
〜出る月や雲も雨の多

エツ甲

草臥  
之信  
桃年

### 終夜柔荳聲

外の寒を咄寝合せ〜  
秋の夜長の長きハ舞舞いのち  
〜の音もさ〜  
我より〜  
〜喚くぬ菊も鳴り〜

ハサミ

素梨  
少女  
湖伯  
久藏  
蛙聞

秋の〜  
蒼〜

虎者

秋聲

### 稻花千頃浪

三月有る〜  
信を〜  
朝起や門田の紫山も〜  
稻妻あり稲の白ひを〜

テハ

アウミ

此山  
春水  
鉄仙  
古猿

### 江聲入秋寺

物音は聞ゆる事よ秋はこれ  
 鐘音は釣ね身しあきの風  
 名月やいら秋を秋柿ミカし  
 きしゆや露のこゝろは隙をし  
 素祿  
 閑齋  
 梅老  
 和潮

月色一函虚

あきあ望と見てしと戸を秋の月ミ  
 秋の夜は足るし秋を完好月  
 仲丸は月軒まらぬあきなる  
 月と宵心年志みく眠るも夜  
 藍堂  
 竹堂  
 卧央  
 潤古トホツウミ

之も秋のうらみ情根を秋の月アハ  
 衾あきし更けり月を秋の夜イセ  
 更秋やいそふ志のあはれ月  
 秋乃月すもあきくや露をミカ  
 名月やせよあきくは御賜  
 十の夜をすこゝ夜は入月夜下  
 月のあきく物あり葉の烟  
 藍堂  
 昌作  
 南亭  
 和樂  
 茂陵  
 大巢  
 不轉

江清月近人

湖や橋をうけく来る月の舟  
 鹿野

松もふも波を志を望の月夜が  
 月を手にし海や湖水のあは味  
 宵月やつゝんとて落る湖乃水  
 あふあふふ月とは見えず湖の上  
 立ちし波の浪も月のむらりか  
 舟もむや心のこぼれ帰る人

乙二  
 一口  
 砂文  
 蕙布  
 梅園  
 彦江

雞穀茅店月

雨をちとく更けり鐘麿の月夜か  
 門田よそて歌草拵り整分哉

推已  
 志道

夜をいそく馬のあゆみや萩の聲  
 清水の河原も見えぬ葉の月  
 坂をとりまへて道方引板の音

波弓  
 又輔  
 塞馬

山曉月初上

空をまへも見えず霧を月のそのの  
 ねもあまふ月を朝を空け也  
 在明也誰を見せ来月れ流

塊翁  
 如水  
 霞江

月尚白波沉

二の月のちの波はかきくわ  
 よる浪の中へきて立、磯の荒  
 松島の夕雲へ入るる月の  
 へりけてもく月と浪新上  
 羅城 公孫 梅葉 月底

遠山音入霧

夕霧の中よ鐘つく小寺  
 茶れ戸や霧よきゆき夕煙  
 霧乃の夜もなきよ出て引物  
 友舟や音のくゆて霧の中  
 圓峽 番氏 一路 圓岳

一人来く霧よ 杭の野中  
 梅香

風便數砧聲

小夜きぬくく音も月と出  
 高くと鳴く吹ゆき夕雲  
 小夜砧 厚衣のあは月夜を  
 三日月を数よくきて音  
 之佛も尻らそら白身 砧の那  
 黒苔のりら音く 吹きぬく  
 木平よりく舟新つる砧  
 五道 五音 松見 未草 吳雪 呂川

聞とめくゆげん寺を望山夜宿  
舟を碇木の明をきくを吹へる  
幾曲りしてても数えし小夜きぬ

イセ

千草  
庭野  
李葉

### 新霜染楓葉

多みちりし亭あり小見の楳が  
みよふくや松の木末を雲の置  
会辨きらまての劇海やうたの葉  
うつくしうなまの赤葉紅葉のな  
松山北りけ追はぬは孔りみち

イセ

狸川  
千鳥  
旭松  
由磨  
眠山

三日月ハ水よ入るる多みちりな  
常磐松の影月をまきあひみちり  
松を春をそしらぬ色を詠田舎  
山枝くまの末く鳴をみちり哉  
松くみし濃くのみきぬお葉陰

アウミ

ミカハ

素律  
華香  
碧翠  
支方  
芝石

### 落葉无行路

葉の戸や列は落葉の道とあり  
舟を思く慕をくまきりや落葉道  
くしの事ありまきりくよ落葉の

山之口

鳳臺  
布雲  
沙路



定るるくはなきや 萬葉集の地を走家  
木の葉降る風の音もはるなり  
ちよ木お葉集るの音もはるなり  
木よ置きの見てもよき多き後  
幣ふらちりこもちる木の葉  
木くくや家鴨と籠ふき  
炭結ら志つす門形は来うな  
廣の音葉我踏ふよ音ハナ  
吹や先ハ葉集るの音もはるなり  
田の中ハ葉集るも捨や神を月

サヌキ

蘭舟

イセ

永世

カガ

有笛

アウミ

欽哉

アハ

崔池

アハ

嵐峰

アハ

臨空

アハ

伯先

アハ

雪居

江の縁千道の付る落葉ハ

金鶴

### 木 落見佗山

戸口くくはそらの山なり冬木立

アウミ

華陶

みそ色木お雲中見も富士の雲

里雀

畫のけハ海を止し冬木くち

アウミ

守右

畫家のう色も由ん久木立

ミカハ

東雅

日之影中やむらさきなる少葉不二

加倉

木をさくくあは葉もそ枯もり

イハ

寸風

雪正紀年よ空のそく鷹ハ

武三

棧や見あげ見おろす冬木立  
雀も毛をさししく寒ぬ冬心  
さうらうらう、多針、留物を冬木立  
漱石 宇喬 得芝

八 蹟板橋霜

梅人も月もあつとー 橋も霜  
橋板の雲よゆ水玉物うな  
刈萱よ狐うられ骨、葉の朝  
霜踏う小鳥のあつと 岸うらう  
馬の尾よむらさきあつと かりうも尾氣  
梅間 杉雲 有鄰 泰樹 左六

舟ちんのまげよ入らぬ火桶な  
ま、月のもあつとあつと 軒瓦  
根つとて程あつとあつと 葉の芽  
鳴ふ鳥もあつとあつと 冬月うら  
冬の朝柳 うらうらう 白ひな  
松うけや也を拍玉、葉の上  
むつとー 尻燈 うらうらう 霜乃家  
一瓢 一武 唯家 今是 梅正 鹿野 蒼乳

破林霜後月

芳のうらうら 庭木よあつとあつと 冬の木  
井里

冬の月いづく更にも志川うたふ  
寒き月やまほれ今ふ母のあはれ  
空月の澄く空し戸のしらみ  
椽欄れもふ乃一さきし冬月  
傳畫より春のあはれ冬月

南鳩  
佳者  
花尖  
西坡  
帝柱

### 山寒水暖水

水より夜の物のまほしき花の影  
紫の戸や氷の上にお水つら  
地よりあはれ秋風氷より春水

蕉雨  
我竟  
野狂

松よりの中より白くけの氷より  
月よりあはれ水のまほしき花の影

如鶴  
奇表

### 一鳥過寒水

冬の野や椽欄れより雪の影  
空よりあはれ水よりまほしき  
管船や松竹の果のしらみ  
夕ふきをむらりあはれ小鴨  
あはれ水よりあはれ水より  
枯松や風あはれ浪越人とす

方明  
岫丸  
加笛  
羨石  
陳令  
如髮

燈うつるや水に雪の汲らる

上多

乙人

# 清晨雪擁門

門曉し雪あふももも雪の雪

サマ

琴州

委物なりたるは掃き支門に雪

シテ

為人

委のらるは雪のハ吹雪の雪

城南坊

片麻あけき雪掃屋あふ雪

岳輪

月ひく雪のころもく雪雀

羽公

大ゆきやふまき雪くたむ心

下子

金隄

大ゆき朝霧や雪れ一二尺

雪島

一日のゆき阿ふたふ積る雪

巴東

雪ハ物まき雪のふく雪は市あり

奥毛

ゆきをまきく雪は雪の枝に

聴松

# 晴雪落長架

新しき物と雪を雪の松

イセ

六車

雪ふく松のけきく是れ

桂堂

志川さやねよなる夜の雪

思玄

雪折きを雪の松の枝

琴左

折る白や雪の枝の雪

丈阿

雪晴く又あつし紀入日

柳冬

# 歌釣寒江雪

釣糸のむきりほく雪の  
雪のほみ舟よりそり新菜  
ゆきの日も 鴨の舞うはるのこし

梅糸  
櫻臺  
士明

# 源季川暗度

齒菜舟や之程も 源の暮  
方眺む おもふ物もて 越ひ危

梅間  
曰人

り季のこころもせぬ山家

士朗

# 餘興詞俵六

さし芝よき山家あり春の水  
田中乃梅影さる雪久し起  
一年の氣を引き 蛤鏡より  
第とよとと口く 千 吟ふ  
いふやとて月より山を眼のあり  
うしろへのとく鹿より驚く  
信つてそこ冷み出る奈良の所

五道  
梅間  
風臺  
庭雅  
道  
雅

むし〜残見をる丸盃乃紋  
昔のぬけ物うらハミ家子数易し  
多たこ吹屋の悪乃水端  
人知ぬ家あつ〜改の瘦て  
言れあつさ残をまの月  
三室戸の鉦の響の宵近く毛  
是屋の伯母をま〜見ぬ汝法  
身とた〜カ〜に辛子香もむ  
ぬきたい時よ羽織脱くせ家  
吳服屋の着物を連よ花の雲

道 臺 道 臺 道 臺 道 臺 道 臺

柳〜ゆ〜〜並ふ〜栢 杭  
田蕨の熟〜菜〜取越〜て  
笑れ佛〜を冷〜あて〜並  
雨り室の帯衣と垣〜打〜あせ  
ね〜ま〜い〜命〜ふ〜中〜の〜貧〜い〜さ  
流〜と〜け〜〜四位〜の〜素性〜の〜あ〜る〜さ  
少〜々〜く〜法〜の〜字〜法〜付〜の〜喰〜物  
おりの下馬〜り〜く〜之〜は〜り〜福  
本〜と〜ま〜す〜と〜つ〜ふ〜く〜の〜た〜り〜  
時〜な〜ぬ〜雲〜あ〜ま〜ら〜る〜の〜月

道 臺 道 臺 道 臺 道 臺 道 臺

隱者おそふり秋興を賦に  
水濶き葦の小舟に酒の色  
あはれ男女乃て歌く裏門  
ひきやりに楳を道言切へ不坂  
目も何れぬ程早きうゆり  
浪あはれく巻の宙もきくは  
あはれさきあむき寒き袖  
花と森し若の扉をき出く  
杖曳あはれり見ゆ系陽空

臺 道 雅 閑 道 臺 閑 臺

